

国際サーカス村通信	VOL.17 N006	2013年 8月 12日 (月)
		文責 西田 敬一
編集 NPO 法人国際サーカス村協会	〒376-0303 群馬県みどり市東町座間 41-1	
Tel0277-70-5010 Fax0277-97-3688	http://www.circus-mura.net	k-nishida@accircus.com

## ● “サーカスはリヤカーに乗って” 来年3月11日 足尾スタート

これまでもアドバルーンをあげている、来年に予定しているサーカス村協会の試み“サーカスはリヤカーに乗って”は、来年3月11日、足尾の町からスタートさせようと考えている。

来年の3月11日は、ほかでもない東日本大震災3年目の当日にあたる。そしてその翌日には福島第一原発大事故が始まり、放出された放射能物質は、原子炉から170キロも離れているわがサーカス村をも汚染した。そしてサーカス学校を一時休校にせざる得ない状況に追い込まれたのである。この事実をより多くの人々に伝えると同時に、ぼくらの日々のサーカス学校の活動を伝えるために、2012年4、5月、“旅する道化師と大道芸人たち”と銘打って、九州、四国へ、オンボロワゴン車に4名が乗り込み、旅を続けた。

そして今なお、福島第一原発の事故は終わるどころか、廃炉作業は進まず、放射能汚染した水を海洋に垂れ流している。この事実だけを見ても、この原発事故は、いまなお、福島のみならず日本、いや世界の陸も海も空気も汚染し続けている大公害にほかならない。それにもかかわらず、政府は原発再稼働を画策し、海外に原発を売り込もうとしている。

このままでいいのかと、心底思う。そして公害について考えれば、ぼくらのサーカス学校のある群馬県みどり市東町沢入は、栃木県との県境の地にあり、県境を越えればそこは、あの日本で最初の大公害を引き起こした足尾銅山の町だ。

ぼくらの今回の旅をはじめると、足尾の町からと考えたのは、日本の発展が多くの公害とは無縁ではないし、その負の遺産の上に、ぼくらの生活が成り立っていることに目を向けたいからにほかならない。

## ●旧松木村でパフォーマンスを試みる

来年の旅を足尾からスタートさせようと考え、そのために少しでも足尾銅山の公害がどのようなものであるかを勉強しようと思った。そのためには、現状も知りたいので、銅の精錬のために吐きだされた亜硫酸ガスによって、廃村となった集落のひとつ、松木村の跡なども見てみたいと、先日かの地を訪れた。そこはすでに墓以外なにもなく、渡良瀬川に注いでいる松木川の対岸に残る、松木沢ジャンダルムという、草木のほとんど生えていないハゲた絶壁が聳えているだけであった。

現在、NPO 法人足尾に緑を育てる会が中心になり、1996年から毎年、植樹が行われて、松木川沿岸はかなりの緑がみられ、かつての煙害によって周辺の山々がハゲ山となった風景は見られない。とはいえ、公害そのものが終息したのではなく、東日本大震災の折には、源五郎沢堆積場が決壊し、鉍毒が流出した事故が起きている。

確かに、足尾の山々に緑をもどすことも必要であるが、それによって、起こしてしまった公害が消えてなくなるわけではない。ぼくらは、一度破壊してしまった自然をもとにもどすことはできない認識にたって、植樹を見守っていく必要があるのではないか。

そこで福島原発事故に目を向ければ、いったい、何世紀後に福島第一原発の周辺に人が住むことができるのか。双葉町は、少なくとも 165 年は住めないといわれている。

そのような事故が再びおこらないという確証がないまま、原発再稼働、あるいはどこかの国に原発を売りつけるようなことがあっていいのか。

足尾の山が植樹によってすこしずつ緑の山々へと変わっている姿、そして煙害によってハゲ山だらけになった時代に撮影された写真などを目にし、いろいろなことを考えてしまった。

\*

話は変わるが、この春、サーカス学校には、ひとりの暗黒舞踏の女性ダンサーが入学した。サーカス技を習得するのではなく、動くからだを作りたいというのが目的であったが、彼女の動きを見ていて、学校にいるあいだに、野外で踊ってもらおうと考えるようになった。場所は、サーカス学校のある沢入の渡良瀬川の河原と足尾。



足尾については、下見の時に、踊ってもらうのは、旧松木村のあたり、松木川の対岸にジャングルムがそびえるところにすることにした。もはや人が住まなくなった、今では人里に降りてきた熊を捕獲した場合、そこで檻から熊を放つという場所。

そんな場所で、彼女に踊ってもらった。

人気のない場所に、踊るからだというよりも、人の息吹のようなものを感じてもらえる映像が撮れればと思った。その息吹のようなものに人々がなにかを感じ、人々が、サーカス学校の生徒たちが、自分たちの目で、足尾を見てみたいと感じてもらいたいのである。

## ●再出発の発表会

去る 7 月 19 日（金）、20 日（土）、サーカス学校開始 12 年目後期の発表会を行った。皆様ご存知のように、放射能汚染による一時的なサーカス学校閉鎖を経て、昨年 10 月、再開したサーカス学校は、今年の 4 月からの生徒を含めて現在 7 名。そのうち一人は休学、一人は仕事の関係で発表会には参加できず、5 名の生徒による発表会であった。

正直 5 名の生徒でどのような発表会ができるかという不安はあったが、そこで腹をくくるといふか、まずはサーカス学校の現状を知ってもらうためにも、卒業生の応援を求めて、ショーを上げることはせずに、ありのままの状態です 5 名の生徒に頑張ってもらおう。あとは、関口事務局長と僕とで、この現状を伝え、発表会を組み立てようと考えた。

5 名の生徒たちのショーは、30 分弱。正直、お見えになったお客様は物足りなく思われると推測できたが、これが再出発した現状である。だがこの現状を見据えて、今後いかなる活動ができるのか、ここから踏み出す次の一步をどのように考えていこうかがぼくらの課題と思えば、その現実をしっかりと確認できるはずだと自分に言い聞かせた。

この 4 月から、関口事務局長は定年退職を機会に、当協会に専従の道を選んでくれた。彼もまた、今後のサーカス村・学校の厳しい道とともに歩んでいこうとしている。今必要なのは、なによりも現状を

きちんととらえることであり、このような状況に置かれていること、その大きな原因が放射能汚染によるものである以上、ぼくらはこの事実を常に明らかにしていかなければならないし、口をつぐむことはできない。

発表会に来てくれた友人の一人は、放射線量測定器を持参。体育館横の排水溝に機器を近づけ、その値が0,1 マイクロシーベルト/時を示したことに驚いていた。そうなのだ、学校の校庭に土盛り排水溝を除染したとはいえ、まだ放射能は消えてなくなっていない。体育館のなかは、0,05 マイクロシーベルト/時と比較的低い値になっているが、学校周辺のすべてが安心できる場所にはなっていない。こうした事実を隠し、もうサーカス学校周辺は安全だと、そんな情報を流すことはできないのである。こうした事実、つねに情報を明らかにしていくこともまた、サーカス学校再出発には欠かせないことなのだ。そして、福島第一原発の事故が終息していないこと、放射能を完全除去できないまま運転する、あるいは再稼働しようとする原子力発電というものを、ぼくらは受け入れることはできない。



5人の生徒による発表会。石黒大智君のリングのジャグリング、中村篤史君の玉乗りフラフープ、知北梨沙君の舞踏、油布直樹君のジャーマンホイール、そして喜多和裕君のデビルスティックとハットジャグリング。だれもが持てる力を発揮して演技した。そしてなんと飛び入りで、初日には卒業生の末廣祥久君、2日目にはデュオアビマノーラの天野真志君とオーリャが演技を見せてくれてショーを盛り立ててくれた。彼らが自主的に参加してくれたことは、こちらが声をかけて参加

してもらおうとは意味が違うというか、彼らもまた、サーカス学校の今後に、大きな力を貸してくれたといえるだろう。そうした力こそ、今後のサーカス学校再建には欠かせないものである。

## ●9月17日(火) 13年目前期授業開始

サーカス学校は只今、夏休み中。

この新学期に2, 3名の生徒の入学が予定されているが、現在、帰省している生徒も新しく入学する生徒たちも、夏休み中、さぼらずに身体強化に努めてもらいたいと思う。

サーカス技は頭で考えるだけでは身につかないのはいままでの間でもないが、ナー ज्या先生は生徒を指導している最中、考えて考えてと何度も声をあげる。先生にとっては、一度できたことが、次にはできなくなるのが不思議でたまらないようだ。これは民族的な違いかもしれないが、日本人の多くは、練習していれば、いつか技が身につくと思っっているようであり、失敗を繰り返してできるようになり、また失敗しているうちにできるようになり、その繰り返しによって、いつか失敗しなくなるというふうに、練習しているうちに自然に身につくだろうと思っっているようなのだ。

ナー ज्या先生はそれが不思議でならない。なぜできたか、できた以上、それをしっかり考えて練習しろと思っっている。

日々の体作りも、ただ、動かしているだけではだめということ。何を、何のために、どのようにやっているか。今日ここまでできたなら、次はどこまでやるか。どのようにやるか、頭を使ってやらなければ、なかなか進歩しないのである。

ぜひとも、この夏休み、身体を動かしながら頭のほうも動かしてもらいたい。

## ●キラリ☆ふじみ “サーカス・バザール” に参加

埼玉県富士見市市民文化会館キラリ☆ふじみで行われた“サーカス・バザール”(7月6日、7日)に、サーカス学校卒業生のクラウン・ナナとジャグラーの高村篤、現在留学中のケベックサーカス学校から帰省中の目黒有沙、それに生徒の喜多和裕の各君が参加した。

この“サーカス・バザール”は、昨年に引き続いて2年目の催しで、地元の農家やお菓子屋さんなどがお店をだすなど地元の交流を目的にしたもので、チラシによれば『「ひと・アート・コミュニティ」の3つの力が融合したら、ひとと地域の新たな出会いの場が、キラリ☆ふじみに生まれる。』と、書かれている。

昨年もサーカス学校は参加させていただいたのだが、今年は、この催しに参加するにあたって、ひとつ大きなチャレンジがあった。というのは、卒業生のクラウン・ナナが、ここキラリ☆ふじみの大劇場で公演するキルギス共和国のトリオ・オスマンというグループと一緒に、ひとつのショーを作るという企画である。

言ってみれば、規模の大きさは違うものの、日本で公演するボリショイサーカスの公演に、日本人のクラウンが参加するようなもの。

リハーサルの日、ナナは緊張のあまり食事も喉を通らないほどであったが、みごとクラウンとしての大役を果たしてくれた。

正直、この試みはぼくにとっても覚悟のいることであった。このサーカスショーの構成に、ほかの経験豊富なクラウンをいれることも当然考えられたのだが、とはいっても、いわゆるサーカスショーのクラウンとして豊富な経験を持つクラウンは日本にはそれほど多いわけではない。それよりも、キグレサーカスの舞台に立っていたナナのほうが、サーカスショーのクラウンの立ち位置のようなものがわかっているだろうと、彼女を起用することに決めたのであった。

この彼女とトリオ・オスマンのサーカスショーの構成は、ACCの辻卓也氏。このショーの成功は彼女の力によるところが大きい。



↑池の仮設ステージ上でパフォーマンスをする目黒有沙。まわりにはバルーンや小旗が楽しげに会場を彩っている。

このほか、今回のバザールで試みたことのひとつは、このキラリの建物の一部が池のようになっていて、そこに昨年からの仮設のステージを作ってショーを行っているのだが、この池にかぼちゃサーカス団のシンボルとして、かぼちゃの飾り船を浮かべることであった。この池全体をいかに楽しい空間にするか。その演出された空間を子供たちがいかに楽しめるかを考えたときに、どうしても飾り船は必要に思えたのであった。この船は、ムンドノーボぼこブヨ〜ダンの木村元・洋子ご夫妻の製作だが、彼らは、この船だけではなく、CIRCUSの一文字一文字の浮き具や小旗の飾り、さらには、室内で展示できるかぼちゃなど、様々なものを作ってくれた。しかも、本業である、小さな動物の形をしたモビールが無数に連なっているサーカスパレードの団を引いて



の楽器演奏と、大活躍してくれたのである。

今回、このサーカス・バザールに参加してくれたのは、啖呵バイの石原耕、ちんどん喜助の豆太郎・渡、パントマイムのチカパンの方々。みなさん、ありがとう。

物販で参加してくださった方々、そして松井館長はじめとするキラリの方々、舞台監督の白石英輔氏、舞台のみなさん、美術の島次郎氏のほか多くの方々、みんなの力で今回の催しが成功したにちがいない、そこに参加できたことはぼくらサーカス学校の面々にとっても貴重な経験をさせていただき、感謝感謝。

## ●出張サーカスワークショップ 大道芸人 くす田くす博

「恵那の奥矢作を知っていますか？」

なんでもない飲み会の席だった。原発の放射能漏れのため、存続を悩まされる「沢入国際サーカス学校」の事を私はなんとなく話した。すると、ある夫婦が、今回の会場となった「奥矢作レクレーションセンター」を紹介してくれたのだった。

何年かサーカス学校のワークショップに参加してきた私には、サーカス学校のワークショップを行ううえでいくつかの「なくてはならない要素」を決めていた。まず、体育館があること。それも近代的なものでなく、私が子どものころ建てられたような広くて、天井の高いやつ。中途半端に二階建てにして、床がゴムのようなスタイリッシュな軟弱なものは駄目。無骨で無駄にでかいやつだ。次に、参加者が寝泊りできる宿舎があること。そしてなにより、都会から断絶されていること。それはもう徹底的に離れていることが重要。そうじゃないと、この誘惑だらけの日本では「集中」なんてものはめったに出来るはずがない。

それら全てがこの「奥矢作レクレーションセンター」には備わっていた。

校長もほぼ即決？でGOサインを出してくれた今回の「沢入国際サーカス学校出張ワークショップ I N奥矢作レクレーションセンター」には、予想以上の参加者が集まった。6月24～30日までの一週間、参加日数は各自まちまちだが、スタッフ、サーカス学校生あわせて約30名となった。

ロングマットを二つ縦に並べてもまだまだ壁は遠い体育館。地元の建設屋に無理な値段で吊ってもらったリング・シフォン・ロープが天井高くからぶら下がっている。トランポリンだって、どれだけ飛んでも天井に触る気もしない。ここなら、相手のパーソナルスペースを気にせず動きまわれる。

「やっぱりここで正解だった」と、私はこの無駄にでかい体育館の壁ぞい、2畳ほどもないスペースで倒立の練習に入るのだった（私にはこれ以上の面積は必要ない）。

練習は朝9時ごろから軽いランニングと準備運動から始まる。季節のせいかわれぐらいい汗をかいている。その後、倒立、またはマット運動をお昼まで行い、1時間半ほどの昼食休みを取って、午後は各自興味のある芸を集中して練習する時間となる。一般参加などで、これと決まった芸のない人は、吊り物にぶら下がったり、トランポリンで跳ねたり、玉乗りしたりとなる。

「アクロバットに興味があってきました！」そんなことを明るく言われると、「この人どんなスポーツやってきたのかな？相当運動能力に自信あるんだろうな」と、少



し身構えてしまう。ところが、実際動いてみるとびっくりするほど動けない。というより自分の身体の動かし方がわからない人が多いことに驚く。テレビ、時には生でスポーツ、ダンス、パフォーマンスなど身体を動かすことを見たとき、「すごいなあ！これは、俺にはできないなあ！」と感心するとともに、そのように身体を動かすためにどれだけの鍛錬と時間を費やしてきたのかと想像し、驚く。

しかし、この鍛錬と時間が想像できないそんな若者（あえて言わせてもらいます）が増えている気がしてならない。上手な先生やコーチに丁寧に教えてもらえば「きっと出来るようになる」「今まではそんなチャンスがなかっただけ…」

もちろんそうかもしれませんが、鍛錬と時間はかかりますよ。

「今回逆立ちぐらい出来るようになれたらいいんですけどね」って、私なんかもうかれこれ8年は逆立ち練習してますけど、こんな程度ですよ。

「思うように動かない身体」これを痛感することが、このワークショップで一番大切な知らなければならぬことだと思った。

次回があるなら改善が必要な、宿舎の問題。20名以上の宿泊は無茶だったのだ。

「立って半畳、寝て一畳」というが、布団は畳よりでかい。当たり前だ。平屋の日本家屋を使った宿舎で、相当広い家だが25人を超えた時には布団の端に布団がかさなり、もう布団でびっしりである。夜中にトイレに行くまでの足の踏み場など全くない。現に私はトイレまでに4人蹴りました（真っ暗なので誰かもわかりません）。ちなみに帰りは3人でした。

そして、携帯電話の電波の問題。この宿舎、携帯アンテナが遠く、ドコモ以外ほとんどの携帯が不通だった。後に隣に住む管理人さんが私物で立てたソフトバンクのアンテナを発見し、その近く限定でソフトバンクの携帯は使えるようになることがわかったが…。ちなみに、私はauだったので、気まぐれに繋がる程度だった。現代人はこのネット社会にどれだけ時間を奪われているかを実感した。6時半に終わってしまう夕食の後、携帯が繋がらないとやることがないので、大の大人が8時ごろには布団に入って眠りだすんですよ。便利になって時間の短縮が可能になったはずなのに、その分以上に日本人は余計なことに時間を浪費していたようだ。

地元の方がいろいろな差し入れをしてくれた。練習をのぞきにきてくれた。明らかに野良仕事のついでにやってきたよ、という格好だった。地元交流はこのワークショップをやることと決めたときの、私の目標だった。黄色かったり、緑だったりする髪の毛の兄ちゃんや、チャラチャラした姉ちゃんが、何十人もやってきて騒いで帰る。そう思われてもおかしくない。芸能なんて、普通の人には理解しがたい世界なのだ。ましてやサーカス。昔の見世物小屋なんかを思い出す、じいちゃんばあちゃんも多いはずだ。そこで、「地元交流」。練習を自由に見学してもらって、週末には2つの企画を打ち立てた。

「ちびっ子運動教室」。小学生対象に、体操ではなくマット運動教室を開いた。前述のとおり、自分の身体の動かし方を知らない子どもが多いのだ。側転や後回りはもちろん、でんぐり返しすら出来ない子どもがたくさんいる。でもこのほとんどが、出来ないのではなく、やり方・身体の動かし方を知らないだけなのだ。

ちなみに私のこどもが小学5年生のときクラスで逆上がりできる子は7人しかいなかったようです。誰も出来るまで練習をしないし、させる大人もいないのです。

しかし、こどもは身体も軽く、なにより素直ですから、身体の動かし方とちょっとした自信で出来るようになるものだ。現に参加者10人中9人が3時間程度の練習で側転が出来るようになった。残り1人も側転もどきまではできるようになった。その後は、個人差はあるけれど、どんどん子どもたち自身で発展型の技に挑戦していた。とにかくこの企画は成功だった。

そして「大道芸を見せる会」。

「いったいこいつらはなにをやるんだ？」それを理解してもらうには、見てもらうのが一番。そこでこの企画を打ち立てたのだが、びっくりするほど大勢が集まった。サーカス学校生たちによる演技、続けて卒業生篤くんの演技、名古屋大道芸人。私は進行および各ネタの繋ぎを担当。お客さんたちはびっくりするほど盛り上げてくれたので、こちらも大変やりやすかった。投げ銭も想像以上にいただき、大感謝だった。そしてなにより、地元との交流を実感できた。

怒涛のように一週間は過ぎ、大きな怪我もなく（数人腰痛やねんざはあった）無事ワークショップは終わった。マットも吊り物もなくなった、ガランとした無駄にでかい体育館を見ながら、校長の次の言葉を考えていた。

「くすくすがやるって言ったら、来年やらんといかんな。」

え！？それを私にゆだねますか？責任者はあなたですよ！

でも確かに、群馬・沢入から、400キロも離れたこんな山奥へ、学校生・スタッフ計10名も連れてやってきて、なんと！参加者全員分の1週間の3度の飯を作ったのはこの西田校長という老人だ。さすがに、崖っぷちに立って下をのぞくまではするが、自分から飛び込むようなことはできない、ということなのだろう…と、解釈。うーむ、わからんでもない。

宿舎を片付け、帰りの車に乗り込むと、お隣、といっても300メートル以上離れたお宅から、ご夫婦とおばあちゃんがわざわざ見送りに出てきてくれた。3人共ニコニコだ。おばあちゃんは正直ヨタヨタだ。お礼を言いながら車の窓を開け、その前を通るとき、ご婦人が「来年も来てね。待つとるよ！」と、なんとも田舎のおばちゃんらしい良い顔で言うのだ。

ああ、これで決まった。崖っぷちで待っているあの校長の背中を、来年へ向けて押してやろう！

## 最新サーカス公演情報

### ★木下大サーカス

●仙台公演 公演期間 2013年8月10日(土)～11月5日(火)

●休演日；木曜日と8/16(金)、9/4(水)、10/9(水)。但し8/15(木)は開演

●会場；名取市イオンモール名取 特設会場 ●電話；仙台公演事務局 022-384-2340

### ★ポップサーカス

●秋田公演 公演期間 2013年7月20日(土)～9月16日(月祝)

●休演日；木曜日。但し、8/15(木)は開演、8/16(金)は休演 ●会場；旧秋田空港跡地特設大テント会場

●電話；秋田公演事務局 (018) 866-9276

### ★ウルトラドリームサマーサーカス2013「エモーション～感激～」

一瞬のうちに衣装を変えていく鮮やかなウィックチェンジ、アクロバティックな技を繰り広げる男性たちは…バレリーナ姿？のバンキン、猫のサーカスに空中ブランコなど、目の前で繰り広げられる妙技の数々！この夏休みにぜひお楽しみ下さい。※遊園地券持参で観覧無料。

●公演期間 2013年7月26日(金)～8月25日(日) ●休演日；8月21日(水)

●時間；11:00/15:30 ※8月13日(火)、14日(水)はナイトショー19:30より

●電話；ルスツリゾート総合予約センター 0136-46-3111 ●会場；ルスツリゾート(北海道虻田郡)内サーカステント

★LE NOIR ～ルノア ダークシルク 2013 THE DARK SIDE OF CIRQUE～

直径 4m のステージを 360 度ぐると客席で囲んだ、至近距離の興奮。わずか 1m 先のステージ上で繰り広げられる、世界トップクラスの超絶シルクアクト。官能とエレガンス漂うファッショナブルな衣裳とラグジュアリーな劇場空間…！大成功を収めたシンガポール公演を経て、進化し続ける「LE NOIR ルノア～ダークシルク～」。〈禁断のシルク〉が、再び東京を衝撃と興奮の世界へ誘う！

●公演期間：2013年11月1日（金）～11月30日（土） ●電話：チケット専用ダイヤル 03-5800-5045

●品川プリンスホテル Club eXにて公演 公式サイト：<http://www.le-noir.net/>

●アートタイムズ No.10 「サーカス学」出帆！

テントの向こうに広がる知の森には、たくさんの数奇な人生がかくされている

「サーカス学」がいよいよ船出します。「サーカス」という言葉のなかった太古の昔から、世界中のあらゆる町で庶民を魅了してきたこの芸能。芸術表現のひとつとしてのサーカスを深く掘り下げることも「サーカス学」ですが、サーカステントにいくつもの入り口があるように、「サーカス学」にもいろいろな入り口があります。

文学、美術、音楽、歴史、政治、社会、科学、フォークロア……さまざまな切り口からサーカスにアプローチすることで、新しい世界が見えてきます。

本誌6号でJ・コヴァックと三原文が追った軽業師・興行師の「リズリー先生」。日本、アメリカ、そしてヨーロッパやアジア・オセアニアまで席卷した先生の活躍ぶりを追っていくと、幕末の日本や、同時代の世界の新しい姿が見えてきました。

今号では、さらに進化したリズリー先生とその周辺の研究をはじめ、日米独露の研究者による「サーカス学」の最新の成果をお届けします。サーカスを通じて世界を見ること、それが「サーカス学」なのです。そして、サーカスはエンターテインメントですから、あくまでも愉しく、知る喜びを求めていきます。

サーカステントの向こうにひろがる知の森を彷徨ってみませんか？そこではサーカスで生きて／生きている人たちの生きざまや熱気も感じられることでしょう。人々のぬくもりに満ちた知の世界がここにあります。

■購入方法（1部800円）

ハガキ・Fax・メールなどでお送り先を明記の上、下記までお申し込み下さい。振替用紙を同封の上、本誌をお送りします（郵送料は無料ですが、振替手数料はご負担をお願いします）。

■申し込み先

〒236-0052 神奈川県横浜市金沢区富岡西2-21-23 大島幹雄 Fax；045-773-4643

メール；IZJ00257@nifty.com

